高齢者の余暇活動に関する研究 —余暇意識と余暇活動パターン、個人属性との関連—

○ 吉野 哲郎 (早稲田大学), 西口 宏美 (九州看護福祉大学), 齋藤 むら子 (早稲田大学)

A Study on the Recreational Activity in the Aged Generation —The Discussion about the Concept of the Recreational Activity—

Tetsuro Yoshino (Waseda Univ.), Hiromi Nishiguchi (Kyushu Univ. of Nursing and Social Welfare), Murako Saito (Waseda Univ.)

1. はじめに

高齢者にとって、余暇生活は大きな意味を持つものと考えられる。定年退職による自由時間の増加、そして人口高齢化による平均寿命の延長により、高齢者の余暇時間は大幅に増加し、生活の大部分を占めることになる。したがって、余暇生活をいかに過ごすかということが、高齢者の生活の充実感や健康までを左右し得る。本研究では、高齢者の余暇活動構造を把握することにより、これを退職後における高齢者の生活を充実させるための基礎資料を得ることを目的としている。

2. 研究方法

(1) 研究の流れ

余暇活動全体を図1に示した概念図のように仮定し、この図のもとで本研究を展開する。

図1. 余暇活動全体の概念図

- 図1において、本研究では高齢者の、
①「余暇意識(余暇活動に対してどのような意義を見出しているか)」、
②「余暇活動パターン(どのような種類の活動を行っているか)」、
③「個人属性(健康、性格、現在の生活状況等)」の3つについて分析し、相互の関連性を検討する。これにより高齢者の余暇活動構造の把握を試みる。

(2) 調査対象

都内のシルバー人材センターに所属の高者を対象に質問紙調査を行う。その結果、得たデータ142名のうち、有効データ102名(平均年齢67.4歳)を分析対象とした。なお、サンプル数の都合上、分析対象

は全て男性とした。

(3) 調査方法

質問紙調査の内容は以下に示す通りである。

① 余暇意識に関する質問

対象者が「現在、余暇活動にどのような意義を見出しているか」を、予想される25項目に対して、5段階評価してもらう。なお、項目については「レジャー白書'98」を参考に作成した。

② 余暇活動種目に関する質問

「スポーツ部門」、「趣味・創作部門」、「娯楽部門」、「観光・行楽部門」の各部門の余暇活動について、どのような活動種目を行っているかを調査する質問項目よりなる。

③ 個人属性に関する質問

対象者の経歴、生活習慣、健康度、定年年齢、住環境、家族構成、経済状況についての質問。これに加え、モーズレイ性格検査(MPI)により、性格傾向を把握する。MPIは、H.J. アイゼンクが開発した性格検査で、E尺度(外向性-内向性を測る尺度)、N尺度(神経症的傾向を測る尺度)についての指標を与える。

(4) 解析方法

質問紙調査の結果を、3-2項の①については因子分析、②についてはクラスター分析を用いて検討する。さらに、①、②および③の相互の関連性についても検討する。

3. 結果

(1) 余暇意識の因子分析

余暇意識について因子分析(主因子法による)を行い、固有値の値をもとに第5因子まで抽出した。

表1. 余暇意識の因子分析結果

因子	因子の解釈	質問項目	固有値	寄与率(%)
1	表現の追求	表現・創作の楽しみ 趣味の追求	0.75 0.67	17.3
2	自己向上志向	自己の向上のため	0.70	11.1
3	競争志向	競い合う楽しみ スリルを味わうため 他人からの尊敬を得るため	0.72 0.69 0.63	10.5
4	気晴らし	気晴らしのため	0.64	9.6
5	実益志向	仕事のため 収入を得るため 社会や他人の役に立つため	0.70 0.69 0.59	8.2
累積寄与率				56.7

バリマックス回転後、表1のように解釈した。

(2) 余暇活動パターンによるクラスタリング

各サンプルの4つの活動部門への参加種目数を変数として、クラスター分析(平方ユークリッド距離によるWard法を適用)を行い、サンプルを3つの集団に分類した。各集団の参加余暇活動部門の傾向から、それぞれ「積極的活動集団」、「平均的活動集団」、「趣味に打ち込む集団」と解釈した(表2)。

表2. 余暇活動パターンによるクラスタ分析結果

集団	解釈	特徴	人数
1	積極的活動集団	全ての部門に多く参加	35
2	平均的活動集団	全ての部門に平均的に参加	26
3	趣味・創作に打ち込む集団	「娯楽部門」が少なく(9.9%)、「趣味・創作部門」が多め(48.9%)	41
合計			102

(3) 余暇意識と余暇活動パターンの関連

余暇意識の因子得点の平均について、4-2項で得た各活動パターン集団間の差を多重比較により検討した(図2)。その結果、因子1と因子3について集団間に有意差がみられた(因子1:集団2<集団3<5%有意>, 因子3:集団1>集団3<1%有意>)。この結果から次のことが示唆される。

- ①「趣味・創作に打ち込む集団」は、「平均的活動集団」に比べ、より「表現の追求」の余暇意識を持つ。
②「積極的活動集団」は、「趣味に打ち込む集団」に比べ、より「競争志向」の余暇意識を持つ。

図2. 余暇意識因子と余暇活動パターンの関連

表3. 集団別の余暇意識因子得点平均

活動パターン集団	余暇意識因子				
	1	2	3	4	5
集団1(積極的)	- (0.01)	+ (0.10)	+ (0.27)	+ (0.15)	+ (0.05)
集団2(平均的)	- (0.35)	- (0.17)	+ (0.10)	+ (0.09)	- (0.20)
集団3(趣味・創作)	+ (0.22)	+ (0.03)	- (0.30)	- (0.18)	+ (0.08)

太字は有意差のあるものを表す、()の中は絶対値

活動パターン集団別に、全ての余暇意識因子について因子得点平均の正負を一覧する(表3)。「積極的集団」は、「表現因子」以外の全ての因子で正の値を示し、「平均的集団」と「趣味に打ち込む集団」とでは、全ての因子について正負反対の値を示していることが注目される。

(4) 余暇意識と個人属性の関連

余暇意識の因子得点について、有意な差をあてる個人属性を表4に示す。各属性のうち、年齢の相違が最も余暇意識因子と関連していることがわかる。また、余暇意識因子5の「実益志向」が最も多くの個人属性要因と関連していることが特徴的である。

表4. 余暇意識と関連のある要因

要因	余暇意識因子				
	1	2	3	4	5
年齢		**			*
定年後年数		*			
経済		*			*
学歴	*				*
性格E(外向-内向性)	*				
性格N(神経症傾向)					*
同居者人数					*

(*0.5%, **0.01%有意)

5. まとめと今後の課題

本研究の結果、高齢者が余暇活動に対して抱く意義(余暇意識)を5つの因子により抽出した。これらの因子は、高齢者の余暇活動パターンや個人属性と関連を持つことがわかった。特に、仕事や社会・他人への貢献、収入などを表現する「実益志向」という余暇意識因子は、個人属性と強く関連している。

今後の課題として、余暇による効果や影響などを視野に入れた因果関係の解明を行う余地があるといえる。

<参考文献>

- [1] 余暇開発センター編(1998):「レジャー白書 '98」,余暇開発センター, pp.20.
[2] MPI 研究会編(1969):「新性格検査法 モーズレイ性格検査法」, 誠信書房, pp.137-152.